

尿路感染における緑膿菌の薬剤感受性について -2012年度・恵寿総合病院の集計結果-

川村研二¹⁾ 窪亜紀²⁾ 古木孝二²⁾ 宮本幸恵²⁾

¹⁾ 恵寿総合病院 泌尿器科 ²⁾ 恵寿総合病院 細菌検査室

【要約】

2012年度・恵寿総合病院の尿路感染における緑膿菌の薬剤感受性について検討した。緑膿菌は全例、複雑性尿路感染症から同定され、カテーテル留置例が過半数を占めていた。薬剤感受性率96.3%がIPM/CS, CAZ, 92.6%がPIPC, AMK, TOBであり、LVFXとGMは70%台の感受性であった。多剤耐性緑膿菌を1例(3.7%)に認めた。

【はじめに】

緑膿菌 (*Pseudomonas aeruginosa*) は、湿潤な環境中に広く存在するグラム陰性桿菌であり、病原性は弱く、健康人が感染症を発症することはまれであるが、日和見感染症の原因菌として重要である。緑膿菌は抗菌薬に対して自然耐性となりやすく、多剤耐性緑膿菌 (MDRP: multiple drug resistant *P.aeruginosa*) はカルバペネム系抗菌薬、アミノグリコシド系抗菌薬、ニューキノロン系抗菌薬の3系統の薬剤すべてに耐性を示す緑膿菌である。

前回本誌において、2011年度の尿路感染分離菌について検討し¹⁾、拡張型βラクタマーゼ (extended-spectrum β-lactamases: ESBL) 産生菌について報告²⁾をしたが、今回は、当院における緑膿菌の薬剤感受性結果について検討したので報告する。

【対象と方法】

2012年9月から2013年2月までの6ヵ月間に泌尿器科で行った尿培養の一部で、緑膿菌が同定された患者を対象とした。198回の培養で大腸菌は93/198 (47.0%)、緑膿菌は27/198 (13.6%) に同定された。緑膿菌が同定された患者の臨床的特徴について表1に示した。全例、複雑性尿路感染症であり、カテーテル留置例が過半数を占めていた。感受性率(%)は感性(S)/(感性(S)+中間(I)+耐性(R))x100とした。

【結果】

表2に緑膿菌の薬剤感受性について示した。薬剤感受性率96.3%がIPM/CS, CAZであり、92.6%がPIPC, AMK, TOBであり、LVFXとGMは70%台の感受性であった。

MDRPを1例(3.7%)に認めた。この症例は、糖尿病、脳出血、神経因性膀胱、残尿量が100ml以上であり、H24/8月には尿培養でESBL産生大腸菌が同定されていた。

【結語】

複雑性尿路感染症の起炎菌である緑膿菌の薬剤感受性について検討したが、MDRPも検出されており、尿道カテーテルの取り扱い、汚染した医療器具などを介しての院内感染としての広がりに対して注意を要する。

【文献】

- 1) 川村研二, 窪亜紀, 古木孝二ら: 恵寿総合病院における2011年度の尿路感染分離菌頻度と薬剤感受性. 恵寿総合病院医学雑誌 1 :50-52, 2012
- 2) 真智俊彦, 宮本幸恵:βラクタム剤の作用と耐性機序(ESBLを含む). 恵寿総合病院医学雑誌 1 :4-7, 2012

表 1 緑膿菌が同定された患者の臨床的特徴

年齢	74.4 (48—88)	
女性	9	33.3%
男性	18	66.7%
単純性尿路感染症	0	0.0%
複雑性尿路感染症	27	100%
カテーテル留置無し	10	37.0%
間歇導尿	2	7.4%
カテーテル留置あり	15	55.6%
神経因性膀胱（残尿量の増加）	17	63.0%
尿路結石	5	18.5%
膀胱癌	4	14.8%
前立腺癌	1	3.7%

表 2 緑膿菌の薬剤感受性率

	PIPC	GPZ	CTX	CAZ
感受性率 (%)	92.6	55.6	0.0	96.3
	IPM/CS	GM	AMK	TOB
感受性率 (%)	96.3	70.4	92.6	92.6
	LVFX	ST	MINO	FOM
感受性率 (%)	74.1	0.0	0.0	0.0